

共生の概念

神 谷 正 義

1. 問題の所在

仏教界で「共生」が纏まった形で大きく取り上げられるようになったのは、法蔵館出版の『季刊仏教 特集 共生思想』（1998 刊）であり、更に、1998 年高野山大学にて開催された日本仏教学会による「仏教における共生の思想」をテーマのもとに発表された内容を取りまとめた学会誌「日本仏教学会報」第六十四号（1999 刊）である。

その 2 年後、浄土宗では「21 世紀劈頭宣言」を発表した。そこでは「浄土宗では 2001 年元日、世界の諸問題を解決する出発点、そして今後百年の指標として「浄土宗 21 世紀劈頭宣言」を世界に向けて発信しました。」とある。この劈頭宣言は、世界の諸問題を解決するため、そして世界に向けての宣言であることを高らかに謳っている。

その基本とする立場が、四句に総括されている。すなわち、

愚者の自覚を（己を省みて、己のいたらなさを知ろう）

家庭にみ仏の光を（暖かい家庭を築こう）

社会に慈しみを（優しさに満ちた社会を築こう）

世界に共生を（共に生きる平和な世界を築こう）の四句である。第四句で共生を「ともいき」と訓読させている。

そして、この劈頭宣言の意義と責務を最後に次のように語っている。「私たちは、前記した負の遺産を引き継ぎ今日を生きています。法然上人が説かれた「愚者の自覚」に立ち返って、平和、環境、倫理、教育、人権、福祉などの諸問題を、自分自身の問題として考え、取り組みましょう、というのがこの劈頭宣言の意味するところです」。

したがって、この劈頭宣言でいう「共生：ともいき」は平和・環境、倫理、教育、人権、福祉などの現代的な課題・諸問題の解決に向かったのものであり、そ

のベースが自分自身の自覚の問題であると捉えるところに特徴があるといつてよい。

こうした現代的な課題に法然浄土教、浄土宗義としていかに理論的根拠を与えることができるのか、またそれに基づく実践は如何にあるべきなのかが劈頭宣言以降の現在であっても問い続けられていると言ってよい。

また同様にこうした問題は、浄土宗という一教団だけの問題ではなく、仏教全体の課題であると言ってよい。こうした人類の課題に仏教はいかに理論的にも実践的にも対峙していくかが問われていると言ってよい。

今回のこの拙論では、仏教を中心とした立場からの「共生」についての論究から見える共生の概念、共生理念の構成要素について取り上げていきたい。共生は人間のすべての行動による諸問題の解決に関わっていると言ってよい。それだけにあらゆる分野で用いられる共生について検証を進めなければならないが、今回は特に、仏教研究における共生を中心とした論考の中で、共生の原理としての構成要素、概念を抽出していきたい。

こうした作業は、多様な共生論が見られる中、諸問題を解決するための仏教共生論を構築していく上でも重要な作業であり、共生思想とは何かに答えていく基礎的な作業でもある。

2. 共生の多義性

共生は様々な分野で多用されている。ある意味流行語であり、大量消費されている言葉であると言ってよい。それだけに共生という語には多様な意味が含まれている。時には反共生と言えるような内容さえ含んでいる場面であっても共生の語が使用されている。

『日本仏教学会年報第 64 号—佛教における共生の思想—』（1999）の「共生の思想」に相当する英訳は「thoughts of symbiosis」となっている。また収録論文タイトルの「共生」に相当する語を様々に英訳している。coexistence、symbiosis、co-living、co-existing、living-together、common-salvation、living interdependently、co-rebirth、その他には、そのまま kyosei (include symbiosis) とするものまた harmonious coexistence さらに co-operativeliving 等が上げられる。また他の

文献では conviviality といった語も使用されている。それら用語の使用は、いずれもその当時の共生の課題と執筆者の共生理解とを受けての訳であると言ってよい。いずれにしても訳語から言えることは、共生理念の構成要素、概念に統一が見られないことであり、概念が多岐にわたっていることを示している。この拙論では共生をそのまま kyosei と表示し、浄土宗の読みにあわせて（ ）内に tomoiki と付記した。

このことは同時に共生という語によって語られる内容が時には反共生的な事柄をも許容する危険性を孕むことにもなる。尾関周二氏はこれまでの共生理念を検討しつつ、共生理念の構成要素として次の8つを提示している（竹村牧男著『宗教の核心—西田幾多郎と鈴木大拙に学ぶ—』春秋社：2012、の中で、尾関の提示を紹介している）。

- ①同化や排除でなく、お互いの違いを違いとして承認して生きていく。
- ②対立・抗争を認めるが、暴力による解決は否定する。
- ③実質的な平等性とコミュニケーション的関係を追及する。
- ④差異の中での自己実現と相互拡張をはかる。
- ⑤「共生」の欺瞞（隠された抑圧）を暴露する。
- ⑥力関係における対等性をはかる。
- ⑦お互いの個性や聖域を多様性として尊重しつつ共通理解を拡大していく。
- ⑧相互援助・協力から新たな共同性を探る。

②に相当する、共生の原理としての非暴力（アヒンサー）については文部科学省の科学研究費の支援を受けて菅沼晃氏を研究代表者とする優れた研究成果が出されているのでそれを参照されたい。

とりわけ注意しなければならないことは「共生」の語を用いることによって⑤の「共生」の欺瞞（隠された抑圧）が隠蔽されない共生論を構築していかなければならない。吉津宜英氏の「不共生と共生、そして非共生—菩薩型サンガを目指して—」では、「これらの共生を巡る議論においては一般的に共生は価値あるもの、目指すべき状況との判断がなされているが、他の参考文献を参照すると、共生社会を単に理想状況としてのみ掲げることはできない。自然的な、或いは人為的な共生社会から様々な非共生の実態が生まれていることも指摘されるからである。」

と言い、参考として法哲学者、井上達夫氏の「天皇制を問う視角—民主主義の限界とリベラリズム—」（『共生への冒険』所収 毎日新聞社 1992）を挙げ、更に「日本の仏教のような宗派性の強い傾向は、私の言うところの「年輪型」の自己論を形成し、内外の基準が機能して、内部に甘く、外部に厳しい排外的な「非共生」の現実を生み出す。三種サンガ論の視点からは、仏教の縦社会的な階層性は声聞型のサンガになり、また自己論では年輪型自己論となり、閉鎖的な自己完結的な社会を形成し、社会の中で共生を生み出すよりも、かえって新たな差別社会を結果することになる懼れもある」と指摘する。こうした差別を助長する、あるいは隠された抑圧をなくす共生の概念でなければならない。

ややもすると現在の仏教々団や僧侶の在り方はそうした問題を含みやすい性質を持っているのかも知れない。また、新たな共生が差別を生み出す危険性の指摘は社会学の立場からも指摘されている（『差別と共生の社会学』岩波講座・現代社会学⑮ 1996 岩波書店）。

こうした指摘を真摯に受け止めながら「共によりよく生きる」「共なるいのちを生かし合う」仏教共生論の構築が俟たれる。そのためにも「共生」の語に含まれる概念を整理していく必要がある。

3. 仏教関係論文に見られる共生の概念

数多くある共生に関する論文の中で、ここで取り上げるのは限られたものでしかないことを初めにお断りする。ここでは先に紹介した『季刊仏教 特集 共生の思想』（法蔵館 1998）所収の仏教関係論文及び『日本仏教会年報』第64号所収論文の中から特に浄土教に関する幾つか取り上げて、そこで語られる共生に不可欠とされる概念を抽出していく。

①尾畑文正氏「共生の仏教学」

尾畑氏は日本仏教が、真に「共生」を課題とするためには非「共生」的な現実と向き合うことを避けてきた歴史と日本的な社会管理システムを問い、社会の中で仏陀が開いた万人共生の世界に立ち返ることが不可欠であるとして、

・「共生」という、一見すると耳触りのいい言葉が先行して、その実、「共生」と

裏腹な私たちの現実が隠蔽されているのではないか。

・「共生」という理念だけが中空に飛び出て、「共生」が内実化されないまま、「共生」の時代だと幻想的に語られているだけではないか。

といった我々の現実的な生き方そのものに疑問を投げかけ真摯に共生を問い直そうとしている。そして共生を考える上で、「ただたんに多くの経典類から、「共生」の課題に見合った仏教用語、あるいは仏教的発想を抽出して、これこそが「共生」を明らかにする「佛教学」であると喧伝して、仏教における「共生」の問題を考える方法論は、現代的な課題としての「共生」を考えていくためにはあまりにも観念的過ぎるのではないか」と指摘し、仏教の側から共生を問う場合、現代的な課題に向かい合う態度を求め、現実的な問題を取り上げて共生の内実を問う姿勢が必要であることを強調する。

ここでは、共生に反するものとして、侵略や差別、支配、違いを差別と排除の根拠にすることが取り上げられている。つまり異なりを認め合い、差別・排除・支配や侵略といった論理、構造とシステムでないことが共生にとって不可欠な要素としている。その上で、浄土教では万人共生の世界を「浄土」として荘厳してきたと意義つける。

②この尾畑氏の主張に対して吉津宜英氏は「不共生と共生、そして非共生一菩薩型サンガを目指して」の論文で、真摯な議論に感銘を受けたとしながらも、続けて尾畑氏が、まず自分の非「共生」的な現実生活への反省と、様々な非「共生」的な世界への批判が前提として、非「共生」的な世界を放置した反社会的な仏教の体質、自己中心的な人権論の流行、そして「共生」を無視した「独生」の現実を批判し、阿弥陀仏の本願こそは「共生の佛教学」の原点であり、「仏教は共生する自己奪還の運動である」とする立場を取り上げて、「阿弥陀仏信仰を持たない私などは帰趨に迷う」といい、「尾畑氏が言う「独生」と言われる現実分析や、様々な「共生」の実態、そして「共生」が生み出す非「共生」的世界の様相、また何を仏教共通の理想的な「共生」の世界とするかを更に検討するの必要を感じたと言って、独自のサンガ論と自己論を展開する。

その展開の中で、共生を阻害する、反共生的なものとして階層性、独善性、原

理主義、超越性、自己中心性、差別、といった概念を挙げ、その反対に、共生になければならないものとして、水平性、対等、平等性、多様性、開放性、社会性を挙げている。また共生には菩薩の済度・利他心、誓願、そして具体的な生活態度として少欲知足、ものを大切に活かす優しさが必要であると、主体性の確立を挙げる。

③高石伸人氏「共生の関係論—「障害者介助」の現場から〈解放〉への越境を問う—」

高石氏は「今日の社会における「民族」や「男女」や「障害」など、あらゆるカテゴリー化に伴って生じる、「非共生的状況」をどのように乗り越えることが出来るか、そのことが今、問われているのではないだろうか」と問題提起する。尾畑氏と同様に、「単純に、仏教の教義・教説を引用して、「共生」の解釈を切り貼りし、論じ合うといった次元の営みを要請しているのではなく、仏教という思想に立ったとき、現実の「差別」や「非共生的状況」がどのように読み解かれ、「共に解放されていくかの道筋を指し示すものでなければならないであろう。」と現実の差別や非共生的な課題に具体的な道筋を立てる必要性を強調している。

そして、様々に異なっていることを当然（承認）とし、最首悟氏の言葉「自発的に、内発的に、これは義務と思うようなことが自分の中に形成されてきて、その義務がかよわい存在、愛する存在に向けて行為されるとき、相手の感謝などに関係なく、深い充足感がはらまれるだろう。（中略）行動原理の根底は内発的義務であり、その内容は「かばう」とか「共に」とか、「世話をする」とか、「元気づける」であって、それを果たすとき、心は無意識のうちに充たされるのかもしれない」を引いて、社会的弱者に「寄り添う」、「世話をする」といった「ケアの態度」は共生にとって重要な要素であると指摘している。

④このケア（注意・配慮・世話等の意味を持つ）と共生の関係に注目する川本隆史氏は『哲学塾—共生から—』（岩波書店 2008、『岩波新哲学講義 6 共に生きる』岩波書店 1998）で心理学者キャロル・キリガンの説「「世話の倫理」とは、一方的な自己犠牲にとどまるものではなく、世話と責任を他者だけでなく自己にも

向け直すことを通じて、「すべての人が他人から応えてもらえ、仲間として数えられ、誰一人として取り残されたり傷つけられてはならない」という普遍的な道徳命法、非暴力の倫理まで高まるものなのだ」を取り上げ、その上で、《共に生きる》という課題に立ち向かうためには、集計された財（豊かさ）の分配を論究するマクロ的なアプローチと、目の前に苦しんでいる他者にどう対応するべきかを考え抜くミクロ的なアプローチとの両者を使いこなさなければなりません」という。こうした視点に立って川本氏は＜教育＞＜医療・看護＞＜エコロジー＞における共生論を展開する。このことについては劈頭宣言でも課題とされる分野と連動してくるため、別の機会に取り上げることにする。

もとに戻って、高石氏は障害をもつ人との関わりの中で感じてきた思いとして、多様性、尊厳性、今日的価値への対抗、競争より助け合い、いのちの平等、傍に寄り添うといったことを挙げている。弱者に寄り添う、ということについては、柏木哲夫氏の『ベッドサイドのユーモア学—命を癒すもうひとつのクスリ—』（メデिका出版）、『生きること、寄りそうこと』（いのちのことは社）等もある。

⑤『日本仏教の社会倫理—「正法」理念から考える—』の著者であって、上智大学グリーンケア研究所長である島園進氏と大阪あいりん地区のふるさとの家で生活相談を続けるカトリック司祭である本多哲郎氏との対談（島園進『宗教・いのち・国家』平凡社、2014）では、本多氏は「教養があって、体が健康で、人づきあいがよくて、友達がいっぱいて、そこそこ経済的にもゆとりがある。結局ボランティアをするにはこれくらいそろっているとちょうどやりやすいとおもうかもしれないんですが、そういう人は、何も相手に与えていないのではないのか。むしろ、社会生活の中で、虐げられているがゆえに、こうなりたい、これは許せない、我慢できない、そう思っている人の願い、その中に、私のいい方をすれば、神が働く。＜中略＞「相手の立場に立って考えよう」というありふれた、当然のことにように思う、無反省に使う言葉。これが差別、偏見を助長しているというのが最近の結論です」と述べている。相手から学ぶという姿勢、相手を尊敬した関わり的重要性を指摘しており、社会的弱者の傍にただいる、寄りそっているこ

と、緊張関係の中にも繋がりが持て、その地区の人が、「兄ちゃん、すまんなあ、おおきに」「あんだ、そこにいてくれてありがとう」と言ってもらえることが共生への入り口であると言う。

更に、高石氏はハンセン病患者の問題を取り上げ、病を甘んじて受ける、それでも生かされているのだから感謝せよといった不当性の助長などがあったことを挙げ、隔離、社会からの排除が共生に反するものであることを指摘して、次のように述べる。「仏教の教え（人間解放の思想）による「共生」関係を、これからも私は求めていきたいと思う。「人を大切にするという思想は、人間だけを大切にすることというのを越えることによってしか、支えられない。生きているものを大切にすることという思想は、生きているものだけを大切にすることというのを越える思想によってしか、支えられない」。それによって、「存在のあらゆるかたちとの共生を享受する感覚」が、はじめてもたらされるのではないだろうか。と締めくくっている。この指摘は他の論者に見られない重要な事項といえる。

生かし、生かされて生きていることに感謝する気持ち、自覚は大切な生き方であることは言うまでもないが、その感謝の気持ちを強要する在り方は共生の欺瞞（隠された抑圧）になる。自己と他者における共生には、自己反省に基づき、他者のあり方を自己のあり方と同一視する、他者の課題を自己の課題と引き受ける態度と行動が求められていると言えよう。

⑥浅井成海氏「親鸞における共生の思想」

「親鸞における共生の思想を論究するにあたって、「共生」という概念をどのように受け止め規定するかという重要な課題がある。共生に対する視点を明確にしておく必要がある。」と切り出して、「仏教で共生が語られる基本は縁起の理法にある。あらゆる存在の相依、相関の関わりを論ずるのであるが、各分野で説かれる共生思想の基底をなすと言えよう」として、仏教共生論の根拠を縁起の理法に求めている。その理由として、「それぞれの個を大切にしながら個が、個としての特質を発揮できるのは、全体の調和があるからである。全体の調和において個がよく生かされるのである」という。個と全体の関係については華嚴経などの説示が参考になるが、個と全体の問題は一つ間違えると全体主義に陥る危険性を持つ

ている。

また人間の自然への対応について、栗原彬氏の（「人間を救う・地球への参画」朝日新聞、1997.12.6）主張を引いて、「地球にやさしい」「地球を救え」という言い方には、傲慢さ、人間中心的な考えがあり、やさしいのは人間ではなく、地球であり、人間が地球を救うのではなく地球によって人間が救われているのである。こうした発想の転換を通して、「他によって生かされている」という考え方の重要性を指摘している。

⑦こうした「生かされている」という考え方を重視するものに、芹川博道氏の『『ともに生きる』思想から「いかされている」思想へ』（北樹出版2011）がある。所収される同タイトルの論文には、仏教の自然観と環境倫理—と付されており、諸宗教の自然観が、現代の自然破壊や環境汚染の問題に対して、思想的な課題を多く提供できる可能性をあることを示唆する。

仏教の自然観を2つに大別して、その1つとして、人間と自然は生命共同体とする思想、諸法実相、天地同根、有情・無情仏性説、草木成仏説を提示して、人間と自然の「ともに生きる」とする優れた環境倫理の思想があるという。人間と自然とは対等な関係にあり、有情にも無情にも、ともに仏性が存在するという仏教の自然観は両者を同等に考える見方に基づいているとする。自己と他者を同等・平等と見る見方は今までの所論でも見られる共生にとっての重要な概念となる。

もう1つの見方として、多くの神々や山岳信仰、森信仰、阿弥陀仏・毘盧遮那仏・大日如来（太陽神）、無情説法、自然即仏、自然によって悟る、等をあげて、人間は自然によって「生かされる」あるいは「生かされている」という環境倫理思想へ展開が可能であるとする。そして、この思想を「生かされている」思想と呼ぶことにしましょうと結んでいる。

これらの中で言われる、草木成仏説については末木文美士氏の『草木成仏の思想—安然と日本人の自然観—』（サンガ2015）や『平安初期仏教思想の研究』に詳しく論じられているし、竹村牧男氏、松長有慶氏、山本良一氏の対談、『地球環境問題を仏教に問う—温暖化地獄を仏教・密教は救えるか—』（一般社団法人未踏科

学技術協会 2015)でも取り上げ注目しているし、天台の本覚思想、弘法大師空海の思想にも注目している。しかし、法然の思想にはこうした思想は積極的に取り入れられていない。

無情なるものにも成仏(往生)の可能性を見出す考え方に、親鸞の立場が上げられる。更に浅井成海氏は、その根拠として、阿弥陀仏の光明に遇うものは、生きとし生けるもの、例え微生物の類であっても喜びが生じ、地獄等の苦から解放されるとする大阿弥陀経の第1願の、曇摩迦菩薩の誓いをあげる。それを親鸞は「唯心鈔文意」で「この如来、微塵世界にみちみちてまします。すなはち一切群生海の心にみちたまへるなり。草木国土ことごとく成仏すととけり。」と述べていることを草木国土悉皆成仏の立場であるとする。更に法照の『五会法事讃』の「能令瓦礫變成金」を親鸞は「變成金は變成はかえなすといふ。金はこがねといふ。如来の本願を信ずれば、かはらつぶてのごとくなるわれらを、こがねにかへなさしむとたとへたまへるなり。あきびと 獵師などは いし・かはら・つぶてのごとくなるを如来の攝取のひかりにおさめとりたまふてすてまはず、これひとへにまことの信心のゆへなればなりとしるべし」と解釈している。こうした理解は我々の存在を草木・山川・いしかはら・つぶてと同質に見る立場である。更に『歎異抄』に親鸞の言葉として引かれる「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」と自己と他者を「同朋」と受け止める思想は共生の基本的なものであるとする。

⑧新井俊一氏「親鸞における共生の思想」

新井氏は、「かつて「和」という言葉が、日本の様々な組織において強者が弱者を封じ込めるために使われたが、「共生」がそのような誤用・乱用を被ることのないように注意する必要がある」と指摘する。そして一般的な用例を取り上げ、日本企業が、自己の存続と繁栄のための手段として「共生」という概念を採用している、また「野生動物との共生」「障害者との共生」「老人との共生」「少数民族との共生」「異文化との共生」「エイズ患者との共生」等々の用法には、強者もしくは多数者がこの言葉を使っている場合が多く、主体の「自我」が厳然として感じられるという。反対に少数者や弱者がこの言葉を使う時には自己防衛的な意図を

持っているとする。どちらであっても主体が自己の利益を大きく殺いてまで共生を語ることはありえない。ここに世俗的な「共生」の限界があり、間違えると思いやりの強者の論理か、世渡り的な論理になりかねないと警鐘を鳴らす。

その上で、共生に仏教が意味の深みを与えるためには、この「主体」を問題にするべきであると共生の論点を明確にしていく。「共生」を唱える本人が、自我を克服して相手を本当に受け入れているかどうかの問題であると注意する。

そして、仏教における共生には、無我を基調とする他との共生でなければならない。仏道を実践し、無我を悟る主体は、自我を取り去った本来の自己であるから、明確な「自己確立」が不可欠であるとする。仏法によって確立された自己があつて始めて、仏教における共生を語る事が出来るという。

更に「人間を超えた大いなる智慧に自ら目覚め、他人にも目覚めさせ、共に仏の国に生まれようというのが理想である。あくまでも無我を体得した上での個人と個人の関係が仏教的共生の根本となる」と結論する。

その上で、親鸞の共生思想の根拠を浅井成海氏と同じく「瓦礫變成金」に言及する。親鸞にとっては、自我が破られ無我の境地に達するとは、如来の本願に照らされて、凡夫としての自己の本来の姿に目覚めることである。この目覚めが他者との共生の原点であるとして、仏の無差別、無条件の慈悲の働きが弘願であり、本願に救われた者としては、すべての衆生が共生の対象であるとする。ここでは「衆生」が共生のキーワードとされている。

結論では、「共生」は如来の願いであり、人間存在の原点—いわば素裸の人間—においては、人間に上下尊卑の区別はない、つまり平等であるとする。ここには如来の前での平等と人間の根源的な自省による平等とが、共生の基点であることを明らかにしている。人間は元来孤独であるが故に、共に生きなければ生きられない存在であると結ぶ。

更に、新井俊一氏は論文の注で、椎尾弁匡師の共生論について論じているが、椎尾師やその影響を受けた黒川紀章氏の共生論についての論究については、次に取り上げる清基秀紀氏、或いは栄沢幸二氏など、また尾関周二・亀山純生氏等の論究を通して別の機会に取り上げることにする。椎尾弁匡師の提唱する共生論の意義や問題点を諸批判を通して明らかにしていきたい。そのことによって、仏教

の共生論のあり方も自ずと見えてくるように思われるし、今日の諸問題に仏教の側から積極的に関わっていけるのではないかと考える。

⑨清基秀紀氏「親鸞と共生」

清基氏は「共生運動と共生」という一節を設けて、椎尾弁匠師の共生論に論究して問題点を指摘する。その上で、仏教的共生に言及して、仏教が殺生を禁ずる考えが基本にあり、すべての生物の命を尊重する仏教にとっては、人間と他の生物との共存という意味での「共生の思想」は仏教は本来持っていた概念と共通するものであるとする。そして不殺生戒と親鸞の関係、肉食の問題を取り上げ、次のように述べる。

「親鸞においても、生命あるものの多様な存在や不可避な差異に対して、そのすべてが阿弥陀仏の救いの対象として、本願に誓われている点では等価値であるという認識を持ち、その上で、他の多くの生物の犠牲の上に成り立っている人間の命の自覚、煩惱具足・罪悪深重の自覚に立つ」ことが共生の原点である言う。自分の命と他の命、すなわち自他が融合するのではなく、他者は他者として不可避の差異がある存在として認め、その上で縁起的存在としての自他の共存関係を認識する、そしてそのすべての論理の根柢に往生浄土と阿弥陀仏の本願があるのが、親鸞に見られる共生の思想であると結論する。

⑩名畑崇氏「親鸞における「共生」の問題—念仏停止をめぐる「魔」との共生—

名畑氏は念仏停止による親鸞の越後への流刑を取り上げ、親鸞における共生の問題を親鸞自らの内なる他者との共生という点から論究する。法然と同様の立場・考え方で、流刑や念仏停止による怨念と報復をしないことを強調する。その上で、「前に生ぜんも者は後を導き、後に生ぜん者は前を訪い、連続無窮にして願わくば休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海をつくさんがための故なり」という親鸞の言葉を引く。この親鸞の立場は法然にも見える考えであり、信仰を異にする者への立場と同じ流れである。念仏往生はただ自己の安穩を願うだけのものではなく、往生して後、すぐに娑婆に還ってもとは親兄弟であった人達と捉えて、念仏の教えを説くこと、還相回向の考え方は法然の考え方を引き継いでいるものである。

⑪ 梯信暁氏「浄土教と共生の思想—環境倫理との接点を求めて—」

梯氏は椎尾弁匡師の共生論が、生態学の「共生 symbiosis」とは無関係であるようであるが、まったく接点がないわけではないという。それは椎尾氏が人間とありとあらゆる生きとし生けるものとの平等の共生、また自然との共生に立つべきことを主張しているとする、前田恵学氏（「椎尾弁匡師と共生の思想」（『印仏研』45-2）の説に基づいて、「平等」の概念が生態学との接点を持ち得るとする。そして共生の世界には、「支配・非支配」の関係は存在しないとする。更に、尊厳においては平等であるとする。それは縁起の関係だからであるとする。

また凡夫は煩惱深重で罪惡生死の存在であるが、この煩惱の全てを滅尽することは不可能であるが、大欲不喜足の煩惱は否定されるが、少欲喜足の煩惱は許されると法然は述べる。但し、浄土への往生を願う心で念仏相續することを第一とする生活をしていくことが、結果として少欲喜足を成り立たすと法然は考えているようである。

環境問題と共生の関係については多くの著作が出されている。その代表的なものを挙げるとすれば加藤尚武氏の『環境と倫理—自然と人間の共生を求めて—』（有斐閣 1998）がある。また仏教の側からの提言としては、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業、龍谷大学人間・科学・宗教ORCの成果である『共生する世界—仏教と環境—』『地球と人間とのつながり—仏教の共生観—』更には立正大学による研究『仏教と自然』などがあるので参照されたい。

⑫ 尾畑文正氏「親鸞にみる共生の思想」

既に尾畑氏については取り上げたが、再度ここで取り上げる。尾畑氏は現実の社会的な矛盾を指摘する。それは先の主張と同曲にあるが、「間柄存在としての人間が、人間と人間、人間と自然、そういう関係性を相互成就的に、豊かに開花させることができるかどうかの問題である」として、「諸法無我」であると見い出して縁起的存在としての人間性を回復して生きるかどうかの問題が、共生の問題であるとする。

親鸞は六角堂に参籠した後法然を訪ね、そこで法然の老若男女、貴賤同族を問わない法然の態度や教えに触れて自らの生き方を法然に託すことになる。その後

法難に遇い、自らを愚禿鸞と名乗ることになる。禿という社会的な存在として生きていくことを選ぶ。自らを社会的底辺に置き、救われるこのない者が阿弥陀仏の本願によって救われるという差別のない徹底した平等主義であったことを明らかにしている。徹底した自己凝視、他者と関わる慈悲心の無い自分でありながらも如来の願船によってあらゆる衆生が浄土の往生できるとする親鸞の立場、自分を根拠にするかぎり（自分を優先する限り、自己中心的であるかぎり、筆者が追加）、共生の世界ははるか遠い世界であるが、阿弥陀如来によって回向された名号、阿弥陀如来の本願によってこそ、共生の世界が開けてくるとするのである。

4. 共生の概念

以上の各氏所論から見えてくる共生の概念には幾つかの共通点がある。今回共生の概念、共生理念の構成要素として取り上げたものは、仏教、その中でも特に、浄土教に関するものを中心とした限定されたものであるが、それでも仏教の立場、浄土教の立場からする共生論では、次の概念が不可欠のように思われる。

- ①自己を凝視して人間存在の限界と凡夫性を自覚すること。
- ②すべての凡夫・衆生を共生の対象として据えること。
- ③差別・支配・排除の論理を持たない。
- ④あらゆる存在の平等が基底となること。
- ⑤開放系であって閉鎖的でないこと。
- ⑥大乘菩薩の精神、慈悲・利他の精神が不可欠なこと。
- ⑦異なり、差異を尊重しあう。
- ⑧非暴力・不殺生を原理として、いのちの深みを互いに尊重し生かしあう。
- ⑨どこまでも現実の社会問題と対峙し、社会的弱者に寄り添い、ケアしていく姿勢が不可欠である。

またこうした共生概念は三重野卓氏が『共生社会の理念と実際』（東信堂 2008）の中で、内閣府（共生社会形成促進のための政策研究会）の提言（カッコ内は三重野氏が言うことを追加する形で筆者が追加した）

- ①各人が、しっかりとした自分を持ちながら、帰属意識を持ちうる社会（自立

と社会的凝集性)

- ②各人が、異質で多様な他者を、互いに理解し、認め合い、受け入れる社会（異質性・多様性・許容性）
- ③年齢、障害の有無、性別などの属性だけで別扱いされない社会（社会的排除がない）
- ④支え、支えられながら、すべての人が様々な形で参加・貢献できる社会（関係性を生かす縁起の立場、参加、ネットワーク、信頼関係）
- ⑤多様なつながりと、様々な接触機会が豊富に見られる社会（関係性を生かす）を受けながら、独自の共生の最大公約数的な定義を出しているのも、仏教の共生論形成にとっても有意義であると考えられるので以下に取り上げておく。

三重野卓氏の定義は以下の通りである。

- ①共生とは、異質なものが、多様なものが、それぞれの差異にもかかわらず、共に在り、存在し、生きることを表す。
- ②共生では、他者を受容し、時には協働し、時には葛藤することを意味する。その場合、異質性を受け入れ、リフレクション（自省）することが必要になる。そして、さらに、共生には次のような性格がある。
- ③共生では、対話、コミュニケーションの視点、及び、対等な関係の視点が不可欠になる。生物界では、利益の視点が重視されたが、人間界では、むしろ共感の視点が重視され、その上で、利益の観点から共生を補強することになる。
- ④異質性、多様性を踏まえながら共生的ネットワークを構築し、新たな協働の関係、共生システムを志向していくプロセスが必要になる。共生社会とは、プロセス概念であると共に社会状態でもある。そこでは、信頼感や社会的な連帯感が必要になる。個人と当該社会を繋げる中間的な媒介項として、例えば、ボランティア、NPOなどが機能することになる。さらに、共生では、以下の点が指摘される。
- ⑤共に在ることによって、他者との関係性、相互の欲求充足の在り方が問われることになる。そこでは、他者の存在によって、個人の「生活の質」を低下させるものであってはならず、何らかの満足、ないしは、利益をもたらすことが望ましい（相利共生、ないしは、相乗共生）。

- ⑥ 共生の価値においては、効率性の価値との関係を考慮する必要もある。また、共生の基礎には、平等、公正、公平などの価値理念が位置づけられるし、自由もその基礎にある。この自由では、個人の自由度を意味する場合もあるし、当該システムの自由度を意味する場合もある。
- ⑦ 共生は、自立とセットで議論されている。そこでは人間観（例えば、他者を内に含んだ自己）や、社会観が問われることになる。共生社会は、同質性による単なる集団主義であってはならない。

等があげられている。

こうしたことを踏まえて、更に

- (1) 日本仏教学研究年報第 64 号にある、諸論文での共生の概念を整理すること。
- (2) また仏教以外の共生論についての概念の整理を行う。そのための資料（今回参考文献として取り上げたもの）を参考までに最後に添付しておく。この参考文献では不十分であることは十分に理解している。今後リストアップを重ねていく所存である。更に、共生に関する著作ではなく、諸論文のリストアップも共生文化研究所にて同時並行で行っているのので、いずれ機会を見て整理できた分からでもこの冊子に掲載していく予定である。
- (3) その上で、椎尾弁匠師、黒川紀章氏などの東海学園大学ゆかりの方々の共生論の問題点と意義および浄土宗、法然浄土教における共生の可能性・課題についてを論じていきたい。
- (4) 更に、仏教以外の共生論の問題指摘を受けて、それに仏教はどのように答えていくことが出来るのか、また仏教が諸思想をリードして共生社会を、共生浄土を構築していけるかの可能性を追求していく。

こうしたことに応えていくための初期作業として今回、共生の概念を拾い出すことをした。まだまだ緒についたばかりであり、研究というレベルに達してはいない。しかし、今回の作業によって、今日の共生における仏教的問題はある程度明らかになったと思われるし、共生の概念をおぼろげながらも明らかにすることが出来たのではないかと思う。

参考文献ならびに共生に関する文献一覧

年代	著者等	書名	出版社
1953	共生会	喜寿記念 椎尾博士と共生	共生会出版部
1973	藤井実応	椎尾弁匠先生の教学と信仰	共生会出版部
1980	日本臨床心理学会編	特殊教育・その構造と倫理の批判－共生・共育の原理を求めて－	社会評論社
1986	井上達夫	共生の作法－会話としての正義－	創文社
1987	黒川紀章	共生の思想	徳間書店
1988	林 靈法	椎尾弁匠先生と共生浄土教	百華苑
	古沢広祐	共生社会の論理	学陽書房
1990	瀧藤尊教	慈悲共生	創隆社
	古沢広祐	共生時代の食と農－生産者と消費者を結ぶ－	家の光協会
1991	花崎皋平	生きる場の哲学	岩波書店
	小川雄平	アジア共生の時代－開発と環境の調和を求めて－	同友館
1992	佐倉 統	現代思想としての環境問題	中公新書
		共生と進化－脳と遺伝子の共生－	培風館
	井上・名和田・桂木	共生への冒険	毎日新聞社
1992	読売新聞	地球と共生する企業	読売新聞
1993	花崎皋平	アイデンティティと共生の哲学（増補）2000	平凡社ライブラリー
	西垣・下村・辻共著	開発援助の経済学－「共生の世界」と日本のODA－（3版：2003）	有斐閣
1994	野本寛一	共生のフォークロア－民族胃の環境思想－	青土社
	M.B.ワンダ宮島磨訳	仏教－解脱と共生への道－	青土社
	槌田 劭	自立と共生－地球時代を生きる－	樹心社
	青木やよひ	共生時代のフェミニズム	オリジン出版センター
	小沢有作	井沢勇作教育論集－共生の教育へ－	明石書店
1995	西川長夫他編	ヨーロッパ統合と文化・民族問題	人文書院
	内藤克人	共生の大地－新しい経済が始まる－	岩波新書
	川那部浩哉監修	寄生から共生へ（シリーズ地球共生系6巻）	平凡社
	尾関周二	現代コミュニケーションと共生・共同	青木書店
	渡部重行	共生の文化人類学－暮らしのトポスと経験知－	学陽書房
	小田実	「殺すな」と「共生」－大震災とともに考える－	岩波ジュニア新書
	鎌田とし子	断除共生社会のワークシェアリング	サイエンス社
	徐 龍達編	共生社会への地方参政権	日本評論社
1996	坂田義教他編著	共生社会の社会学	文化書房博文社
	川那部浩哉	生物界における共生と多様性	人文書院
	松田裕之	「共生」とは何か－搾取と競争をこえた生物どうしの第三の関係－	現代書館
	河内・桜谷共著	動物の生態と環境－動物との共生を目指して－	共立出版
	尾関周二編	環境哲学の探求	大月書店
	井上・上野・大沢他編集	差別と共生の社会学	岩波講座：現代社会学15
	梅原猛	共生と循環の哲学－永遠を生きる－	小学館

	R/E/カーター、山本訳	東西文化共生論—比較文化の視点から—	世界思想社
	宇佐神正明	よりよく生きるために	北樹出版
	黒川紀章	新共生の思想	徳間書店
	中島正博	開発と環境—共生の原理を求めて—	溪水社
1997	坂井俊樹	韓国・朝鮮と近現代史教育—共生・共存の視点から—	大月書店
	日野光雄	ブルボリスの真実—自然・愛・病との共生を語る—	講談社出版
	森下郁子・依理子	川と湖の博物館—8共生の自然学—	山海堂
	田村光彩	改訂新版 統一ドイツの苦悩—外国人襲撃と共生のはざまで—	技術と人間
	福島智	盲ろう者とノーマライゼーション—癒しと共生の社会をもとめて—	明石書店
	天野明弘	総合政策・入門—環境との共生を目指す—	有斐閣アルマ
	渡辺信夫	農とふるさと再生戦略—「共生の時代」を拓く—	かもがわ出版
		アジア試練を超えて—賢人が語る「共生への道」—	日本経済新聞社
	榎原英資	新世紀への構造改革—進歩から共生へ—	読売新聞社
	武者小路公秀編	東アジア共生への道	大阪経済法科大学出版部
	藤田紘一郎	共生の意味論—バイキンを駆逐してヒトは生きられるか?—	講談社ブルーバックス
	竹沢尚一郎	共生の技法—宗教・ボランティア・共同体—	海鳥社
	甘露の会編	「共生」へのプログラム—人間・教育・宗教—	平和文化
	船井幸雄編	エヴァの発見—共生・互恵の地球社会を目指して—	ビジネス社
		生き方の座標軸—共生社会への先駆者たち—	ビジネス社
	ジャックリヌス、林瑞枝訳	宗教の共生—フランスの非宗教性の視点から—	法政大学出版局
	藤田英典	教育改革—共生時代の学校づくり—	岩波新書
	C.W.ニコル	環境の世紀へ—地球・市場・人間の共生—	毎日新聞社
	吉田仁	Word Original Goal—共生主義時代への道標—	日本図書刊行会
	上武健造	共生の経営論—日本的経営から日本型経営へ—	八千代出版
	白石克己編	生涯学習論—自立と共生—	実務教育出版
	マブール・ハク著	人間開発戦略—共生への挑戦—	日本評論社
	宇佐美まゆみ編	言葉は社会を変えられる—21世紀の多文化共生社会に向けて—	明石書店
	嶺井正也	障害児と公教育—共生教育への架橋—	明石書店
	米原幹夫	21世紀が見えてきた—自然との共生を目指す変革—	電力新報社
	栗原彬編	講座 差別の社会学 共生の方へ	弘文館
1998	武田一博	市場社会から共生社会へ—自律と協同の哲学—	青木書店
	季刊仏教43	特集：共生の思想	法蔵館
	金東勲他	問われる多文化共生—教育・地域・法制度の視点から—	解放出版社
	溝上・堀共著	多文化教育—多文化の共生は可能か—	あずさ書店
	倉地暁美	多文化共生の教育	勁草書房
	楠 敏雄編著	自立と共生を求めて—障害者からの提言—	解放出版会
	岡本・平田・岩重編著	人間生活学—生活における共生の理念と実践—	北大路書房
	宮本憲一・遠藤宏一編著	地域経営と内発的發展—農村と都市の共生を求めて—	農文協
	東海自治体問題研究所編	自立と共生の地域産業	自治体研究会

	安俣則夫編著	人権と共生のまちづくりー参加型学習の実践からー	明石書店
	21世紀を考える市民の会	21世紀の豊かな生き方ー共生・死生・豊かさー	神保出版会
	岩波書店	新版『岩波 哲学・思想事典』	岩波書店
	佐伯他編	共生の教育	岩波書店
1999		日本仏教学会報64号ー仏教における共生の思想ー	日本仏教学会
	鈴木正崇編	大地と神々の共生(講座:人間と環境10)ー自然環境と宗教ー	昭和堂
	大西正宜	環境と共生する建築25のキーワード	学芸出版社
	西尾テヅル	エコロジカル・マーケティングの構図ー環境共生の戦略と実践ー	有斐閣
	中嶋充洋	ボランティア論ー共生の社会づくりを目指してー	中央法規
	水谷幸正	仏教・共生・福祉	思文閣出版
	横川和夫	もうひとつの道ー競争から共生へー	
2000	仲田直	共生教育すすめー新しい時代の教育課題に向けてー	ミネルヴァ書房
	宮内海司	共生の哲学ーそのシステムと世界観ー	情況出版
	三重野卓	「生活の質」と共生	白桃書房
	阿木幸男	非暴力トレーニングの思想ー共生社会へ向けての手法ー	論創社
	徐・遠山・橋内編著	多文化共生社会への展望	日本評論社
	稲田敦子	共生思想の先駆的系譜ー石川三四郎とエドワード・カーペンターー	木魂社
	大谷恭子	共生の法律学	有斐閣選書
	藤森隆郎	森との共生ー持続可能な社会のためにー	丸善
	マーギュリス	共生生命体の三十億年	草思社
	田村太郎	多民族共生社会ニッポンとボランティア活動	明石書店
	石塚・上杉監修	共生社会と協同労働	同時代社
2001	大江健三郎他	シンポジウム共生への志ー心のいやし、魂の鎮めの時代に向けてー	岩波ブックレット528
	日本比較政治学会	民族共存の条件	早稲田大学出版部
	加藤尚武編著	共生のリテラシーー環境の哲学と倫理ー	東北大学出版会
	早稲田大学公民教育編著	共生と社会参加の教育ー総合的学習と社会科・公民科授業の創造ー	清水書院
	西川潤・野田真里編	仏教・開発・NGOータイ開発僧に学ぶ共生の智慧ー	新評論
	佐藤郡衛	多文化共生社会の学校づくり 国際理解教育	明石書店
2002	吉田・下・尾関編	「共生思想」の探求ーアジアの視点からー	青木書店
	高尾利数	共生への道をさぐる上・下ー異文化の融和は可能かー	NHK出版
	ニアン・スマート石井訳	世界の諸宗教Ⅱー変容と共生ー	教文館
	西川富雄	環境哲学への招待ー生きている自然を哲学するー	こぶし書房
	柴沢幸二	近代日本と仏教家と戦争ー共生の倫理との矛盾ー	専修大学出版局
	花崎皋平	<共生>への触発	岩波書店
2003	月尾嘉男監修	環境共生型社会のグランドデザイン<共生>への触発	NTT出版
	大原明美訳	北欧の消費者教育ー「共生」の思想を育む学校でのアプローチー	新評論
	片山隆裕編著	民族共生への道	九州大学出版会
	岡村・玉田編集	人権の新しい地平ー共生に向けてー	学術図書出版
	金子・藤原・山口編	東アジアで生きよう!ー経済構想・共生社会・歴史認識ー	岩波書店

	伊東俊太郎監修	文明間の対話に向けてー共生の比較文明学ー	世界思想社
	園田恭一編	社会福祉とコミュニティ共生・共同・ネットワーク	東信堂
	野口・桂木編著	共生社会の創造とNPO	明石書店
	桂木隆夫	ことばと共生ー言語の多様性と市民社会の課題ー	三元社
	大阪大学21世紀COE	言語の接触と混交ー共生を生きる日本社会ー	大阪大学
	寺田貴美子	共生社会とマイノリティへの支援	東信堂
	樋田 劭	共生共貧 21世紀を生きる道	樹心社
2004	内藤正典	ヨーロッパとイスラームー共生は可能かー	岩波新書
		仏教論叢48号	浄土宗
	毛利和子他編	日中関係をどう構築するかーアジアの共生と協力をめざしてー	岩波書店
	内海・山脇編著	歴史の壁を超えてー和解と共生の平和学ー	法律文化社
	筑波大学附属小学校	子どもの豊かさに培う共生・共創の学びー道徳・社会・音楽・他ー	東洋館出版社
	西村洋子	変化する社会と家族の役割・価値ー生命の尊厳・平和と共生の文化・社会の礎は家族に始まるー	学文社
	多文化共生キーワード	多文化共生キーワード事典	明石書店
	本多勝一	山・自然との共生（環境問題の未来4）	旬報社ブックス
	村瀬忠雄	共生人間論序説ー仏教は世界を救えるかー	風媒社
	ダドリ著・中島・堀口訳	人と神々と自然の共生する世界	たちばな出版
	千葉旻弘監修	国際教育協力を志す人のためにー平和・共生の構築へー	学文社
	船橋洋一	歴史和解の旅ー対立の過去から共生の未来へー	朝日新聞社
	武藤整司	人間の輪郭ー共生への理念ー	不二出版
		佛教論叢49号	浄土宗
	マーギュリス	細胞の共進化（下）	学会出版センター
	加藤英俊	多文化共生のジレンマ グローバリゼーションのなかの日本	明石書店
2005	山本真紀	「共生」に学ぶー生き物の知恵ー	裳華房
	国際基督教・上智大学	平和・安全・共生ー新たなグランドセオリーを求めてー	有信堂
	東洋大学国際共生社会	環境共生社会学	朝倉書店
	加藤信朗監修	共生と平和への道ー報復の正義から赦しの正義へー	春秋社
	金子勇編	情報化による世代共生の福祉コミュニティに関する研究	ニッセイ財団
2006	金 泰明	共生社会のための二つの人権論 情報化による世代共生の福祉コミュニティに関する研究	トランスビュー
	里深文彦	共生する科学技術ー自然・愛・病との共生を語るー人間・社会ー	コロナ社
	ジョン・グレイ・松野訳	自由主義の二つの顔ー価値多元主義と共生の政治哲学ー	ミネルヴァ書房
	遠藤圭子訳	共生という生き方ー微生物がもたらす進化の潮流ー	シェパソン・ウェアーク
	植田晃次・山下仁編著	「共生」の内実ー批判的言語社会学からの問いかけー	三元社
	神田・村瀬編訳	宗教間の対話と共生のためにーエキュメニカルな指針ー	新教出版社
	矢口芳生	共生農業システム成立の条件	農林統計協会
	総務省	「多文化共生推進プログラム」の提言	総務省
	総務省	多文化共生に関する研究会報告書	総務省
	三沢編	共生型まちづくりの構想と現実	見洋書房
	内閣府	共生社会促進に関する指標体系的解説	内閣府

2007	平野貞夫	ジョン万次郎に学ぶ「自立と共生」の理念に生きた男一	イブシロン出版企画
	滝口他	共生のスペクトル	DTP出版
	共生社会システム学会	共生社会へのみちすじ	農林統計協会
	ボーム著・金井真弓訳	ダイアローー ー対立から共生へ、論議から対話へー	英治出版
	真宗高田派正泉寺北島編	浄土真宗と共生	リーラー遊5 文理閣
	宮台・堀内・鈴木共著	幸福論ーく共生>の不可能と不可避についてー	NHKブックス
	中村了権	親鸞仏教<いのち>の共生力	春秋社
	片山善博	差異と承認ー経瀬理念の構築を目指してー	創風社
	岡崎降編	共生日本語教育学ー多言語多文化共生社会のためにー	雄松堂出版
尾関・矢口編	共生社会システム学序説	青木書店	
2008	川本隆史	双書哲学塾ー共生からー	岩波書店
	坂井一成	ヨーロッパの民族対立と共生	芦書房
	濱口晴彦編著	自立と共生の社会学(現代社会学のトピックス3)ーそれでも生きる理由ー	学文社
	東洋大学国際共生社会	国際共生社会学	朝倉書店
	共生倫理研究会編	共生の人文学ーグローバル時代と多様な文化ー	昭和堂
	内田・高木編	地球・環境・資源ー地球と人類の共生をめざしてー	共立出版
	鶴崎靖夫	Together With himー大乘淑徳学園の挑戦ー	IN通信社
	三重野卓編	共生社会の理念と実際	東信堂
	吉富志津代	多文化共生社会と外国人コミュニティの力	現代人文社
崔・加藤編	日本における多文化共生とは何かー在日の経験からー	新曜社	
芹川博道	著作集7 仏教と福祉ー共済主義と共生主義ー	北樹出版	
2009	高橋敬一	「自然との共生」というウソ	祥伝社
	稲富進	ちがいを豊かさー多文化共生教育の明日を拓くー	三一書房
	竹内整一	「かなしみ」の哲学ー日本精神史の源を探るー	NHKブックス
	大柳満之編	仏教の共生思想と科学技術	丸善
	河東田 博	ノーマライゼーション原理とは何かー人権と共生の原理の探求ー	現代書館
2010	小宮・武内・住他編著	サステイナビリティ学ー生態系と自然共生社会ー	東京大学出版会
	阿部珠理	ともいきの思想ー自然と生きるアメリカ先住民の「聖なる言葉」	小学館新書
	辻村・大沢編	ジェンダー平等と多文化共生ー複合差別を超えてー	東北大学出版会
	松岡幹夫	法華経の社会哲学	論創社
2011	内藤克人	共生経済が始まるー人間復興の社会を求めてー	朝日文庫
	山折哲雄・赤坂憲雄	反欲望の時代へー大震災の惨禍を越えてー	
	馬淵 仁編著	「多文化共生」は可能かー教育における挑戦ー	勁草書房
	龍谷大学 人間・科学・宗教OCR	地球と人間のつながりー仏教の共生観ー(ORC研究叢書11)	法蔵館
		共生する世界ー仏教と環境ー(OCR研究叢書6)	法蔵館
	栞野敏明	共生ともいきのデザインー禪の発想が表現をひらくー	フィルムアート社
	長谷川匡俊	支え合う社会にー宗教と福祉と教育とー	高稜社書店
	芹川博道	「ともにいきる」思想から「いかされている」思想へ	北樹出版(改訂版2013)
東洋哲学研究所編	「女性の世紀」を創るためにー共生・平和・環境ー	東洋哲学研究所	

	柳澤嘉一郎	利他的な遺伝子－ヒトにモラルはあるか－	筑摩選書
	加藤博史	共生原論－死の質、罪の赦し、可傷性からの問い－	晃洋書房
	近藤 敦編著	多文化共生政策へのアプローチ	
	馬淵 仁編著	多文化共生は可能か－教育における挑戦－ これは多文化教育・多文化共生教育に関する邦訳文献が紹介されている。 参照されたい。また私の小論では手にできた範囲での紹介である。	
2012	宮本久雄編	宗教的共生の思想	教文社
	中山智晴	競争から共生の社会へ－自然のメカニズムから学ぶ－	北樹出版
	堀 正嗣編著	共生の障害学－排除と隔離を超えて－	明石出版
	尾関周二・武田一博編著	環境哲学のラディカリズム－3.11をうけとめ脱近代化へむけて－	学文社
	浄土宗総合研究所編	共に生き、共に往くために－往生と死への準備－	浄土宗
	神山五郎	従病という生き方－病気との共生が人生を豊かにする－	草思社
	佐々木倫子編	ろう者から見た「多文化共生」－もうひとつの言語的マイノリティ－	ココ出版
	佐野 誠	99%の経済学－誰でもが共生できる社会へ－	新評論
2013	吉富志津代	グローバル社会のコミュニティ防災－多文化共生のさき－	大阪大学出版会
	宮本久雄編	宗教的共生の展開	教文社
	牧野英二	「持続可能性の哲学」への道－ポストコロナル理性批判と生の地平－	法政大学出版会
	信田理奈	人間中心の開発とジェンダー－共生社会の実現に向けて－	三恵社
	矢口芳生	今なぜ「持続可能な社会」なのか－未来社会への方法と課題－	農林統計出版
2014	大谷恭子	共生社会へのリーガルベース－差別とたたかう現場から－	現代書館
	塩谷 大橋他著	共生の法社会学－フクシマ後の＜社会と法＞	法律文化社
	石原美奈子編	せめぎあう宗教と国家－エチオピア 神々の相克と共生－	風響社
	鈴木則子編	歴史における周縁と共生－女性・穢れ・衛生－	思文閣出版
	宮本久雄編	宗教的共生と科学	教有社
	山岸敏男他編	社会のなかの共存	岩波講座：コミュニケーションの認知科学4
	島蘭進対談集	宗教・いのち・国家	平凡社
	ハバーマス他	公共圏に挑戦する宗教－ポスト世俗化時代における共棲のために－	岩波書店
	津田直則	連帯と共生	ミネルヴァ書房
2015	橋木俊詔編著	共生社会を生きる	晃洋書房
	徐傑・朱炎訳	共生経済学（上・下）	東洋経済新報社
	尾関周二	多元的共生社会が未来を開く	農林統計出版
	牧野広義	環境倫理学の転換－自然中心主義から環境的正義へ－	文理閣
	山本登志哉	文化とは何か、どこにあるのか－対立と共生をめぐる心理学－	新曜社
	日本心理学会監修	思いやりはどこから来るのか？－利他性の心理と行動－	誠心書房
	佐藤久夫	共生社会を切り開く－障害者福祉改革の羅針盤－	有斐閣
	末木文美士	草木成仏の思想－安然と日本人の自然観－	サンガ
2016	堀井野生夫	人間共生の思想－ヘーゲル哲学を初めとする西欧の思潮の大きな謬り－	文芸社
	村田和代編	共生の言語学－持続可能な社会を目指して－	ひつじ書房

※尾尾弁匡師の共生についての著作は別に論じる際に一括して提示する。

キーワード：共生、共生の概念

(かみや まさよし 東海学園大学 共生文化研究所 所長・教授)